私の生活設計

滋賀県立農業大学校教務課長　中村千代子
（昭和41年卒）

大学を卒業して，かれこれ30年になる。正式には29年６ヶ月。この間，様々なことはあったが楽しく仕事を続けてきた。結婚したときも，子どもが誕生したときも仕事を辞めようと思ったことはなかった。これには夫の協力も，家族の協力もあったが何よりも自分の強い意志があったからだと思っている。

もともと，30年間も勤めるつもりはなかったが仕事は悩みに突き当たったりはしたものの楽しかったし，さらに人の寿命が延びてしまって私の生活設計を変更せざるを得なくなったからにすぎない。

私達の学生の頃は，女性は結婚や出産を契機に家庭に入るのが通例であったが，私の選んだ生活設計は人生60年の1/3は親の保護を受けて成長し，次の20年は自分の得た知識や技術を社会に還元し，最後の20年は余暇を楽しみながら，自分の好きなことをして暮らすというものであった。このためには男性に寄り添って生きる生き方ではなく，男性と対等に，互いに助け合い，力を出し合って生きていきたいと考えた。そのためには自ら経済的にも，精神的にも，生活的にも自立することが要求される。そして私は「私の考えを理解し，協力してくれる人があれば結婚すればいい」と考えたのだ。今ではごく当たり前の考えなのだが，その頃，私はずいぶん悩み，この結論に達するまでに１年くらいかかったように思う。大学３回生，私の実質的な成人式であったと思っている。これ以後私の生き方は大きく変わることなく現在に至っている。

昭和41年，卒業後，私の選んだ仕事は生活改良普及員（現在，この資格試験は都道府県別におこなわれており，就職先は受験地に限らず全国共通の資格ですから，希望する土地で受験可能です）。地方公務員として農家，農村の生活改善指導を行うものであった。農繁期の共同炊事の献立作成，睡眠をしっかり取りましょうと改良寝間着や改良枕の作製，台所改善など衣食住の指導に農家に出かけていった。今では農家の暮らしも良くなり個別農家の指導は少なくなり，「地域の特産づくり」や「住みよい町づくり活動」などに変わってきている。家政学の範疇だけにとどまらない仕事になってきてはいるが「生活者の視点」が不可欠であることに変わりはないし，女性の持つ優しさや，しなや

かさが，今後益々必要になってくると思っている。

今，私は県立農業大学校で若い学生たちを相手に仕事をしている。ここには，米や野菜，花，果物がいっぱいあって私の生活を豊かにしてくれる。ともすれば若者に敬遠されがちな農業に携わりながら，学生たちはいきいきと楽しそうだ。

年齢を経るごとに専門識から遠ざかり，総合的な仕事に携わることになるが「生活者の視点」「女性の視点」を大切にしながら仕事を続けていきたいと考えている今日この頃である。